

◆八木健 選

～峰崎成規『遊戯の遠景』（角川書店）を読む ①～

著者は昭和二十三年生まれ。平成二十四年に結社「沖」に入会。現在、「沖」同人会幹事長である。

峰崎氏はいくつもの顔を持つ。海外に工場を運営しながら、地元の行徳（千葉県市川市）の文化活動に尽力なさっている。母方の生家である御輿店が国の有形文化財となり、町の歴史や文化を伝える資料館として開設する際には、御輿の資料や道具の収集などに奔走された。

句集のタイトルの「遊戯の遠景」とは、おそらく世の中を広角レンズで捉えて、その風景の中にいる自身をも含めて、この世は遊び事の世界と冷めた目で見ているということではないだろうか。現実の理屈のみに囚われず、広く深い視野によって詠まれた三三〇の作品は、どの句も奥行がある。

句集の表紙画についてもここで触れておきたい。画は、シュルレアリスムに大きな影響を与えたイタリアの画家、ジョルジュ・デ・キリコの「午後の魅惑」である。タキシードを着た男性の白い像が絵の中央に配置されているが、後ろ姿で前方を眺めている。町の中のようなのだが、右手前と左側に建物があり、人間は遠くに小さく二人のみで、二人とも黒いスーツを着ている。右遠方に煙を吐いて機関車が走り、植物、動物もなく無機質、非現実的で、空想の中の風景のように感じる。「遊戯の遠景」とは、この絵のようなイメージなのだろう。

非力ながら句を鑑賞させていただく。句集は、平成二十八年から令和五年の句を六章に分け、それぞれにタイトルがつけられている。順にご紹介したい。

第一章「記憶の森」（二〇一六～二〇一八）

木の実落つ記憶の森に獣道

第一章のタイトルとなった作品。最近、本物の静かな森が少なくなった。いつの間にか道ができ、森の中を車が一気に駆け抜ける。だから本物の森は記憶

の中にしかない。かつての森にあった「獣道」が懐かしい。また、その森とは、自分の頭の中の混沌とした記憶のことでもある。

陽炎や直線の街退屈で

この句も「記憶の森」と通じるものがある。それは日本古来の「美学」とでも言うべきか。定規で描いた人工的な線は美しくない。日本の伝統的な庭や建物は非対称である。遊びのない直線の街は退屈。道や建築、人の関係もそうである。

濁世見し白魚眼のみ澄みきらず

白魚の体は透き通っているが、濁世を見てしまった眼だけは透明度が落ちてしまった。白魚の嘆きは、世の中を見てきた作者自身の嘆きでもある。

せつちをいささか照れて地虫出づ

啓蟄の句であるが「地虫」は特定の虫ではない。総称である。「いささか照れて」と擬人化の句になっていて楽しい。虫の気持ちを代弁しているわけだが、作者が虫の立場になり、「擬虫化」したからこそ詠めた。

腸に世過ぎの苦み秋刀魚食ふ

秋刀魚の腸に苦みがある。魚の腸の苦みは通好みで乙なものだが、腹に苦いものを抱えているのは人間もまた同じ。

地球やや円周伸ばす霜柱

愉快だ。まさに滑稽句である。滑稽句にはいろいろな技法があるが、この句は、誇張という手法が使われている。分かりやすくていい。誰もが納得、誰も反論できまい。

闇なくば銀河も詩も輝かず

一般的には「闇」の存在を褒めることはしない。ところがこの句では「闇があるからこそ」銀河も詩も輝くのであるとして「闇の存在」を絶賛している。句集の随所に、この逆転の発想によって詠まれた作品が光っている。陰、裏、負とされるものからの視点が、読者に新鮮な気付きをもたらしている。

木枯や刻一刻と星を研ぎ

木枯らしは形としては見えないし、人間にとって好ましいものではない。ところが、星を研いでいるのだという発想は作者独自のもので、これも読者は参ったということになる。まさか木枯らしが夜空を輝かせている功労者として賛美されるとは、実に斬新であり詩を感じさせる。

湯豆腐に意思あるやうな浮き沈み

日常生活に見つけた寸景である。おそらく卓上コンロで作られる湯豆腐に違いない。土鍋の底に敷かれた昆布の座布団に鎮座していた豆腐も、湯が沸くにつれて膨張して浮かんでくる。科学的に説明のつく現象ではあるが、まるで生き物のように自分の意思で上がってきたと見たところが誰もしていない発見である。